
宙太郎温泉旅行

栗山ぶにねこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宙太郎温泉旅行

【Nコード】

N7609N

【作者名】

栗山ぷにねこ

【あらすじ】

2010年8月14日のブーケット8で無料頒布させていただきましたものです（＾―＾）

サークルでメインにやっている小説「都留たんっ！」の番外編（＾

＾
たまの休みにふと、温泉旅行に行く事を思いつき、兵吉達を誘っていく事に。

登場人物紹介

> i 1 1 5 3 8 — 1 6 3 7 <

黒巻宙太郎（40）
くろまきそらたろう

この物語の主人公。若星町商店街で「BIG BANG」というおもちゃ屋さんを経営している。とにかくエロく、男の店員ばかり雇ってはケツを触りまくっている。丸々と太った体型。

> i 1 1 5 4 8 < r u b y > < r b > 1 6 3 7 <

腰山兵</rb><rp></rp><rt>こしやまへい</rt><rp></rp></ruby>吉（40）
こしやまへい

宙太郎の小学校時代からの幼なじみで、小柄でぼっちゃりしている。同棲中の恋人、都留男を温かく見守る一方、「都留男は俺だけのものだ！」という独占欲も持っている。普段は友人の露と共に「H & A」という本屋さんを経営している。

> i 1 1 5 4 9 < r u b y > < r b > 1 6 3 7 <

出瀬</rb><rp></rp><rt>でぶち</rt><rp></rp></ruby>都留男（35）
でぶち

兵吉の恋人で、彼と同じく小柄でぼっちゃりしている。普段は宙太郎の店で働いている。誰とでも仲良くなれる性格の持ち主で、困っている人を見ると放っておけない。

>i11550<ruby><rb>1637<

田之島</rb><rp>(</rp><rt>たのしま</rt>
><rp>)</rp></ruby>仁之(40)

宙太郎の高校時代の友人で、ぽっちゃりした体型。高3の頃「いつか店を持つて、お前を見返してやる!」という約束を彼とし、今年になってやっと、故郷の夜月町ヨシキナツチに「ISLAND」を開店した。

>i11954<ruby><rb>1637<

快</rb><rp>(</rp><rt>かい</rt><rp>
>)</rp></ruby>裸露(40)

兵吉の幼なじみで、商店街と一緒に「H&A」という本屋さんをしている。サングラス愛好家で、いつもサングラスをかけている。温厚な性格だが、下ネタ大好き。兵吉と同じぽっちゃりした体型。

>i11992<ruby><rb>1637<

男盛</rb><rp>(</rp><rt>おとこもり</rt>
><rp>)</rp></ruby>漢太(40)

「BIG BANG」の向かいで定食屋さん「男盛食堂」を営んでいる宙太郎の同級生。男らしい顔つきで、体の至る所に椿の入れ墨を入れているが、心は乙女である。自称「ミズ若星町商店街」だが、誰も認めていない。怒ると男に戻り、凄まじい勢いを見せる。

宙太郎温泉旅行

「温泉旅行にでも行かないか」

茶を飲んだ後、ふと言ってみた。

兵吉は微笑^{へいきち}んで、「それもいいな」と言った。

小学校時代から長い付き合いがある幼なじみで、背が低くてぽっちゃりしている。

普段は商店街で、同じく幼なじみの露と二人で書店をやっている。
「お前と露^{あつわ}と仁之^{としゆき}と四人で、ぶらり行ってみるのもいいんじゃないか」

「そうだな。ちようどお盆だし、店を臨時休業にして行くか」

「観光して、温泉に浸かつて、美味しい飯でも食おうじゃないか」

「記念撮影とかすると、後々思い出に残るしな」

「すんごく楽しそうですね」

廊下の方から都留男^{つるお}がやってきた。

背が低くてぽっちゃりしていて、鼻の頭とほつぺたに絆創膏を貼っている。

兵吉のかわいい恋人で、俺がやってるおもちゃ屋「BIG BA NG」のかわいい店員でもある。

「そうだろ？」

「でも何で急にそんな事言い出したんだ？」

「特に理由は無いぞ。ただ、盆休みをどう過ごそうかと思ってな」

「まあお前、金はいくらでもありそうだからな。実家が金持ちだし」

「確かにそうだが、さすがにもういい大人だから、自分で使う金ぐらい自分の給料から出してゐるぞ」

「はあ、つ、さすがに四十になると変わるもんなんだなあ」

「そりゃそうだろう。いつまでも親に甘えるわけにはいかねえ。店始めた時に、もう親を頼るのはこれで最後にしよう、って決めたんだ」

「言つてたな。お前昔から親にナントカを買つてもらつたとか、ドコドコに旅行に行ったとか話してたから、未だにボンボンのイメー
ジが消えねえんだよなあ」

「今の俺は、ただのエロオヤジだぞ」

「自分で言つなよ」

兵吉は声を出して笑つた。

「温泉つて、どこの温泉に行くんですか？」

都留男が台所から出てきた。

いつの間にかコップにジュースが注がれてる。

「そうだなあ。春野温泉^{はるの}なんかどうだ？」

「おつ、いいな。あそこの美味しい湯豆腐を食つて、都留男にも土産に買つてこようかな」

「楽しみにしとくぜ」

「露と仁之にも話しとくか」

「今ここに呼ぶつて言う手もあるぞ」

「そうだな」

露と仁之に話をしたり、旅館や飛行機の手配したりして、あつという間に数週間が過ぎた。

「いよいよ今日が当日だ。」

大きな旅行カバンを持って外に出ると、もう三人が来ていた。

店の二階が俺の家になつてるので、その前で待ち合わせしようつて事になつたんだ。

「おやつ、もう皆揃つてるのか」

「当然だろ。ガキの頃に五分钟前集合つて言われたからな」

「五分どころか十分前だぞ」

「早い方がいいだろ」

「まあな。さつそく行くか」

「おつ」

空港まで行き、飛行機と電車を乗り継いで三時間ほどで春野温泉に着いた。

思えば友達と旅行なんて、大分久しぶりだ。

街で会って声をかけて、その後親密な関係になった男達とは何回か旅行に来た事があるが、それはやましい目的があつての事だ。

今回の旅行にはやましい目的なんて一切ない。

旅館に荷物を置いて一息ついた後、観光の為に街に繰り出した。

「やっぱり温泉街の雰囲気っていいもんだなあ」

「そうだなあ。こうやって歩いてるだけでも癒されるしなあ」

「おつ、春野温泉限定サングラスつてのがあるそうだぞ。行ってみねえか？」

「ははは、露は本当にサングラスが好きだなあ」

そんなわけで、サングラスの店に入る事になった。

普段は穏やかな露のテンションが急に上がり、あちこち見て回っている。

「宙太郎そらたろうにはこういうのが似合うと思うぞ」

兵吉が黒のメタルフレームのサングラスを手を取った。

レンズが少し曇ったようなデザインになっている。

「どれどれ」

試しにかけてみると、確かに思ったよりもなかなかイケてる感じだ。

「ほう、いいもんだな」

「だろ？」

「俺はこれにしてみたぜ」

仁之は少し垂れ下がったようなデザインのサングラスを選んでいった。

「おつ、なかなか似合ってるぞ」

「ふふふ、やっぱり俺の目に狂いは無かったな」

「さっそく買ったぜ。春野温泉限定サングラス」

露が緑色のぶつといフレームのサングラスをかけて、こちらにや

ってきた。

「えらく派手なんだな」

「ここに「H A R U N O H o t s p r i n g」って書いてあるんだぞ」

両手で丁寧に取って、フレームの端の部分を見せてくれた。

確かに白い小さな文字でそう書いてある。

サングラスをしげしげと見た後、露の顔に視線を移した。
切れ長のきれいな目をしている。

「どうしたんだ？」

「いやっ、サングラス取る度にきれいな目だなあと思ってるんだ」

「お前が言つとエロく聞こえるぞ」

「安心しろ。やましい意味は微塵もないぞ」

「そうか」

露は再びサングラスをかけた。

「お前らは何も買わないのか？」

「そうだな。じゃあ兵吉が薦めてくれたこれを買うか」

「俺もこれを買うぜ」

サングラスを買った後、この温泉街で湯豆腐の次に有名だという
饅頭を食べに茶屋に入った。

温泉水を使った饅頭や酒粕を使った饅頭、重層を使った饅頭など、
色々な饅頭がある。

席に着き、各々に饅頭を頼んだ。

俺は温泉水を練りこんだ饅頭にした。

「しかしまあ、こうやって集まって旅行に行くのって何年ぶりだろ
うなあ？」

「商店街ではよく会うが、旅行にまでは行かねえからなあ」

「俺なんて、こないだ久しぶりに宙太郎にあつたばかりなんだぜ」

「まさかお前がホントにライバル店開くとはなあ」

高校時代に仁之とした約束を、しみじみと思い出した。

三年になって、周りが進路の話をするようになった。

俺と仁之も帰り道の途中で草っぱらに座って、二人で語り合った
っけ。

親に資金出してもらって店やるって事話したら、あいつ急に立ち
上がって「俺も金貯めて、いつか店造って対抗してやるからな！
待ってるよ！」とか言い出したな。

その時は冗談だと思って、「ああっ、待ってるぞ」とだけ言っ
ておいたが、最近になって本当に故郷の夜月町に店を開いたって聞い
て驚いた。

「気が付けば、夜月町に残ってるのは俺だけになっちまったなあ。
みくんな隣の若星町に行っちまった」

「俺は高三の時、店の物件をあちこち見て回ってたら今の場所を見
つけてな。イメージにぴったりだったから、すぐ決めたんだ」

「俺は都留男が高校卒業したら一緒に暮らそうって、ずっと考えて
たんだ」

「兵吉がどうしても若星町に店を構えたいって言うから、俺もそれ
に従ったんだ」

「そうかあ。お互い頑張ろうな」

「ああ」

「あゝら、楽しそうねえ」

「おやっ、この声は。」

隣の方を見ると、思った通りの奴がいた。

額、頭、両二の腕、胴体にくつきりと描かれた椿。

男らしいへの字型の眉毛、眉間のしわ、大きな瞳。

がっしりした体を、フリルがどっさり付いたかわいらしいピンク
色のワンピースが包んでいる。

「か、漢太かんたっ！」

三人は驚いた様子で奴を見ている。

「やっぱりお前か」

「こんな所で会うなんて、奇遇だわあ」

「きつとお前の美しさが、俺たちを引き寄せたんだな」

「まあっ、宙ちゃんうまいんだから」

漢太は俺の肩を軽く叩いた。

このオカマも兵吉達と同じく、小学校時代からの幼なじみだ。

普段は若星町商店街で定食屋をしている。

「何でこんな所にいるんだ？」

「決まってるじゃない。女の一人旅よ」

「女の一人旅？」

「そうよ。いい女は一人旅を楽しむものなのよ」

「んなワンプース着てか？」

「これはこの日の為に、新調し・た・の・よ」

「似合ってるぞ」

「ふふふ、宙ちゃん。おだてても何もでないわよ」

「ははははは、別に何も期待してないぞ」

「ところで、宙ちゃん達は何でここにいるわけ？」

「ああっ、実は」

「余計な事言わねえ方がいいぞ」

仁之が耳打ちしてきた。

「何でだ？」

「何でも何も、漢太の事だから厄介な事言い出すに違いねえ」

「そうか？」

「何ひそひそ話してるの？」

「何でもねえぞ。俺達はな、四人で温泉旅行に行こうって計画して

ここに来たんだ」

「おいっ！」

「四人？」

漢太の目が点になった。

「ああっ、そうだ。こうやって出かけるなんてしばらくぶりだからなあ」

「宙ちゃん」

「ん？ 何だ？」

「何であたしを誘わなかったのかしら？！」

漢太の目の色が変わった。

仁之は頭を抱え、兵吉と露は怯えている。

「いやっ、すまんかった。でも、お前も一人旅に出かけて、こうやって出会えたんだからいいじゃねえか」

「それとこれとは話が別よ！ こうなったら、あたしも参加させていただくわ！」

「えっ？！」

三人は目を丸くして驚いた。

「おやつ、いい女は一人旅を楽しむもんじゃなかったのか？」

「あらっ、皆でわいわいやるのもいい女の条件よ」

「そうか」

その後、漢太を連れて彼女（と、呼ばないと怒るのだ）が好きなアクセサリーショップに行ったり、民族雑貨のお店に行ったりした。やがて夕方になり、旅館に戻って温泉に浸かる事になった。

バスタオルと普通のタオル、ビニール袋、替えのパンツを持って、みんなで大浴場に向かった。

「おっ、兵吉。いいトランクス履いてるんだな。青のチェックが涼しげだぞ」

「これはな、都留男とのお揃いなんだよ。あいつも喜んでたぞお」

「それはよかったな。ここだな」

暖簾を潜って中に入った。

大浴場の脱衣所だけあって、とても広々としている。

各々好きな場所に行き、籠に荷物を入れた。

着ていたＴシャツを脱ぎ、ズボンも脱いだ。

隣の兵吉も同じように服を脱いでいた。

むちむちとしたいい体だ。

腹もいい具合に出ている。

都留男は毎日この体を見て、毎晩この体に抱かれてるのか。そうこうしてるうちに、奴はパンツを脱ぎ始めた。

男の一番大事な部分が、ゆっくり見えていく。

「もう、そんなじろじろ見るなよお」

パンツを脱いだ後、少し笑いながらこちらを見てきた。

「いやあ、何年経ってもいいちんこしてるなあ、と思ってな」

「俺が都留男の男だって事、忘れるなよお」

「もちろんだ」

「お前はどんなちんこしてるんだよ」

「俺はお前より太ってるから、ちよつと小さめだと思っぞ」

そう言いながら、この旅行の為に買った黒いボクサーパンツを脱いだ。

「な？　ちつこいだろ？」

「そんなにかわんねえぞ」

「そうか？　大抵の男からは結構がっかりされるぞ。デブだけど巨根っていうのを好きな奴が、結構いるみたいだからな」

「何の話してるんだ？」

仁之と露がこちらにやってきた。

「楽しく愉快でエッチなちんこトークだ」

「ははははは！　お前らしいな」

「露は本当に下ネタ好きだなあ」

「お前も人の事言えねえじゃねえか。で、どんなちんこトークしてたんだ？」

「もちろん、デカさの話だ。俺、兵吉よりちつこいかと思ってたんだが、奴から見たらそうでもねえみてえだったんだ」

「俺はお前よりデカい自信があるぞ」

露は堂々と、前掛けにしていたタオルを取った。

「ほう。確かに若干はデカいな」

「いやっ、変わんねえだろ？」

「俺のはどうだ？」

仁之も前掛けのタオルを取った。

「ほう。デカさは俺と変わらんが、立派なもんだな」

「皆同じぐらいだろ？」

「あなた達、何お下品な話してるの？ さっさと入るわよ」

漢太の一声で、俺達はやっと風呂の方へと向かった。

風呂も脱衣所に負けないぐらい広く、たくさんの人が湯に浸かったり、体を洗ったりしていた。

俺と兵吉は露天風呂の方へ行き、目の前に広がる豊かな緑の景色を眺めながらのんびりと湯に浸かった。

行く途中、露と仁之がまだちんこのデカさの話で盛り上がってるのが耳に入った。

「いい景色だなあ」

「そうだなあ」

ほんとに、いい景色だ。

思えば若星町にいる時は、店の仕事で毎日忙しいからなあ。

売り場に出て接客してるし、店長だから経営管理もしてるし、事務は岳一と烏美人にやってもらってるけど、それでも何かあった時には立ち会わなきゃいけないえ。

昔はよく街に出て男をナンパしてたりしてたけど、この歳になると体力も精力も落ちてきて、最近ではほとんどしてねえなあ。

休日はほとんど昔買ったエロビデオ見たり、TV見たり、甥っ子の乱蔵の様子を見に行ったりで潰れてるよな。

仕事仕事で、趣味らしい趣味はエロビデオの購入と男のナンパぐらいだったからな。

そう言えば、何で店開こうと思ったんだっけ？

親父がおもちゃ会社やってるのもあって、昔からおもちゃは大好きだった。

他の奴と違って、周りにおもちゃが溢れてた。

小学生の頃は結構憧れられたが、中学生になるとほとんどの奴が興味無くなって「ただのエロいボンボン」扱いになった。

自分では大丈夫なつもりだったが、やっぱりちよつとショックだった。

急に家にあるおもちゃが全部幼稚に見えて、反抗期みたいな感じにもなった。

でも、それじゃいけないと思った。

おもちゃは何も悪くない。周りの奴が歳と共に忘れ去るのも当たり前だって。

高校生になって、昔から親に甘えてばかりの自分を変えようかと思った。

でも、どうやって変えたらいいのか分からない。

ちょうどその頃、兵吉から本屋をやる予定だって言う事を聞いて「お前も何か店をやったら、自立も出来て変わるんじゃないか」って言われた。

それで、何か店をやるうと思った。

最初は飲食店とか自転車屋とか、おもちゃとは関係ない店にしようと思った。

でも出来なかった。

食べ物も飲み物も自転車も、俺が本当に好きなものじゃなかったからだ。

親父の仕事の話を聞いたり、押し入れの奥にしまったおもちゃ達を見たりして、俺が本当に好きなのはおもちゃだと悟った。

息子がおもちゃ関係の仕事に着けば、少しは親孝行にもなると思った。

店をやるって初めて言った時、親父もお袋も目を丸くして驚いた。親父の会社で働かないかと言われたが、俺が自分を変えたい旨を伝えると、快く了承してくれた。

開店資金を出すといわれて断ったが、結局俺の反対を押し切って二人とも貯金をはたいて出した。

「家から店に通えばいい」と言われたが、俺は家を出て一人暮らししないと変われないと思い、物件が決まるとすぐ家を出た。

元々二階を住居スペースに出来る店、という事で物件を探していたのだ。

あれから二十二年、俺は変わっただろうか？

まあ、少しは人生経験が積めたような気がする。

あのまま行くと俺は親父のコネで親父の会社に入社して、一生べつたりだったかもしれない。

そう考えたら、店を始めて色んな奴と出会えたり、店でしか味わえない経験が出来たりして大分良いと思う。

店もそこそこ繁盛して、こうして温泉旅行に来れる余裕も出来たしなあ。

「さて、そろそろ中に入るか」

兵吉が立ちあがって、頭に乗せていたタオルを前掛けにした。

「そうだな」

部屋に戻ると、もう夕飯が準備されていた。

浴衣に着替え、テーブルの前にある座布団に正座した。

地元で獲れた新鮮な魚を使った料理がずらりと並んでいる。

鯛飯や刺身、天ぷら、豪快な海老や蟹もある。

「やっぱりこういう所で頂くお料理は格別ねえ」

漢太は丁寧に刺身を食べた。

「たまにはこういうのもいいもんだなあ」

「聞いたわよ、仁ちゃん。男がいるんですって？　しかも同じお店の店員ですって？」

「もうバレちゃってるのか」

「この間兵ちゃんが言ってたわよ。で、どんな男なの？　イケメンなの？」

「銀行に勤めてた時の後輩だ。顔はお世辞にもイケメンとは言えねえぞ」

「あら、残念」

「俺達はお前とは違うから、イケメンなんか狙わねえぞ」

そんな事を言いつつ、鯛飯を口に入れてみた。

鯛の味がすっかり飯に染みていてとても美味い。

「そう言えば、宙ちゃんも彼氏つくらないの？」

彼氏……かあ。

皆が勝手な事を言っただけで盛り上がる中で、一人考えてみた。

思えばこれまで、何人かの男に「本気で好きだったのに！」とか「心から人を愛するって事が出来ないのか?!」とか言われた事があるな。

セックスだけで満足する男もいれば、それ以上の事を望む男もいる。

考えてみれば、何人かの男の恋心を踏みにじってきたな。

そう言えばこの間、真奈が俺を好きだって言うのが広報に載って騒ぎになったな。

真奈の気持ちはあいつが高校生の頃にバイトし始めてから気付いたが、店員同士で恋愛のゴタゴタを起こすのはまずいと思ったし、店の切り盛りでそれどころじゃなくなった。

そうこうしているうちに二十年近くが過ぎて、いつの間にか真奈もいとおっさんになった。

あの騒ぎが起こるまで、俺は真奈の気持ちから逃げていたような気がする。

昔の男だっただけだ。

悲しそうな目で「セックスだけだなんてひどい！」と訴えてくる男に、いつもの調子で笑いながら返事を返したが、本当は俺も傷ついていた。

こんなにも思ってくれている人がいるのに、俺はなんて事をしてるんだろう

そういう男とは、これ以上傷つけるのが嫌で連絡を取らなくなり、相手からの連絡も来なくなり、疎遠になっていった。

その繰り返しだった。

思ってる事をあまり口には出さないが、真奈も相当傷ついてるは

ずだ。

今は三十五のいい大人だが、バイトし始めた頃はまだ十六の少年だったんだ。

好きな人の許で働いてるのに、仕事上の関係があるとはいえ、何も答えてくれないなんて、十代の少年には耐え難いものだったかもしれない。

それでもそれを乗り越えて、今までずっと働いてくれている。

……もう、いいだろう。

あいつにはたくさん苦労させた。

これからは、あいつの為に何かできる事をしてやろう。

もう男として見られていないだろうから、彼氏にはなれないな。

それでもせめてもの罪滅ぼしとして、何かしてやりたい。

そうだ、デートにでも誘ってみようか。

映画館もいいし、遊園地もいいな。

あいつ家で寝巻ばかり来てるみたいだから、服を買ってやるのもいい。

彼氏にはなれなくても、これからいっぱい思い出を作っていこう。

「宙ちゃん、どうしたの？ 彼氏つくるの？ つくらないの？」

漢太がまじまじとした様子でこちらを見てくる。

「彼氏はずくらないぞ」

「あらっ、どうして？」

「俺、あんまりそういう形式にこだわらないんだ。恋人っていう関係じゃなくても、相手の事を思っっていっぱい愛情を注いでやれば、それでいいと思う」

「宙ちゃんらしいわね」

「まあな。この近くに山があるみたいだから、明日はハイキングにでも行くか」

「おっ、それはいいな。体力ならお前に負けねえぞ！」

「仁之は本当に負けず嫌いだなあ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7609n/>

宙太郎温泉旅行

2010年10月8日13時48分発行